
甘甘Berry

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘甘Berry

【Nコード】

N3412M

【作者名】

ロースト

【あらすじ】

二人の出会いには必然だった。

けれど二人が共に笑い、思い出を作り、愛し合ったのは決して必然ではなかった。自然と、惹かれあった。

けれどそれは二人には許されない小さな空間だった。

幸せな楽しい時間は終わりを告げる。だからこそ僕は君に渡そう。

感謝と想い、最後の贈り物。

B (b e r r y) ・ S (s t r a w b e r r y) ・ F (f o r e s t)

僕の大好きな君の名前はブレン。

もう聞くことのなくなった僕の名前。

物語はこの時点で既に終わっている。

今となつては新しい風を待つばかり。

新しい物語の始まりを待つばかり

君は今眠っている。 静かな森の中で、僕たちだけしか知らない、特別な森の中で。

いつからだろう。 君を女性として見ていたのは。

いつからだろう。 君を愛するようになったのは。

いつからだろう。 君を好きになったのは。

いつからだろう。 君が眠っているのは。

いつからだろう。 こうしているのは。

いつからだろう。 こうしている事に慣れてしまったのは。

いつからだろう。 ここを離れられなくなったのは。

いつからだろう。 新しい風を求めているのは。

いつからだろう。 僕が狂ってしまったのは……

この森は誰の手にも染まらない。 他の人には知られない。 わからない。 理由は簡単だ。 みんな認めようとしない。 認識しようとしない。 この森は特別な森。 僕たちの、大切な森。 この森はエルフのいた森。 今はなきエルフの財産とも言えよう。 エルフの生まれる森、命の森

……。

この森はすでになくなっている

……

君の憂いを秘めた瞳は硬く閉ざされている。

白銀色に微かな淡い苺と桃が混じったかのような甘く、やわらかく、意思のある色が入った、めったに見ないような瞳の色。もう、長い年月の間見ていない。もう、決してみることは叶わないのだろうとわかっていても、その色をまたみたいと思ってしまふ自分の弱さに吐き気がする。

金の長い睫毛はとてもふんわりとしていて、君のかわいくて綺麗な顔にはよく似合っていた。あの時よりも幾分か長く見える。長くなる筈など、ないのに。そんなのはただの錯覚。これは自分があ頃を美化しているということ。つまり、自分は『今』を受け入れられず、逃避していると言うこと。今も彼女に対する気持ちは変わらないのに。

桜色の唇は、小さく上品さが滲み出てくる口の形。でも今はほとんど色を失いかけている。それを愛おしく思う。とても、とても。でも、それでもそれを見るたびに視線を逸らしたくなる。今にもその唇に触り、熱を求めたい。そうしても、返ってくるのは熱ではなく、冷たい残酷な感触だ。わかっていて。それでも、愛おしく、フト気を抜けば現実に狂ってしまいそうになる。その唇に触れれば、また、息をしてくれる、そうであれば、どれだけいいのか。

小さく形の良い整った鼻は顔のちょうど中央にある。とてもかわいらしい鼻だ。

少し膨れた頬はいつもの薔薇色ではなくなっている。いつもこの頬を赤く染めていた君は熱に浮かされているように僕を見ていた。それは夢見る少女としか言えない程。いや、実際に、彼女は夢見ていたのだろう。幸せが続けばいいと願い、幸せは続くと盲目的に信じていた。続くものなど、永遠など、ないと知っていたからこそ、幸せな時間に陶酔し、喜び、逃避していたのだ。現実と言う苦しみか

ら、真実と言う重い糧から。

金色の長い綺麗な髪の毛、ふわふわしていてサラサラで。太陽に似合う綺麗な長い髪いい匂いのする髪。僕は君の髪の毛が大好きだった。僕が触ると顔を真っ赤にして恥ずかしがる。

細く小さい体は豪華な服に彩られていて

とても鮮やかだった。フリルやリボンがたくさんついていて、実際よりずいぶん大きく感じられる。だが、それでも隠し切れない体はとても見事なプロポーションでとても軽い。

そのやわらかく綺麗な肌は森の木々の間から漏れる月光によって光っている。元々白かった肌はよりいっそう白くなっている。

細く長い綺麗な指は既に体温をなくしている。その指は何かを包み込んでいる。僕たち二人のこの森でとった写真 最初で最後の写真
……

僕はブレンの手に触った。ブレンの薬指に指輪をはめる。渡すはずだった、ブレンへのプレゼント。ブレンが好きだったberryとstrawberryの形の入った、僕のデザインした指輪。この森のモチーフの入った僕からブレンへの指輪。

なぜこんなことになってしまったのか。

まだ、僕にはわからない。どんなにどんなに近くても、どんなにどんなに遠くても君は無表情のまま変わらない。ああ神よ、主よ、なぜ彼女がこんなことにならなければならなかったのだろう。なぜ彼女なのだろう。なぜ僕でなかったのだろう ……

僕には力がない、だから、彼女を守るだけの力が欲しい。力を下さい。僕に、力を……。せめて彼女を、彼女を安心させるだけの力を 下さい。

僕のありったけの思いを神に願いながら君の冷たい頬を包むようにふんわりと触る。そしてふつくらとしたやわらかそうな唇に自分の

唇を重ねる。少し経ってから唇を離す。それでも彼女は目覚めない。物語とは違いキスで目覚めることはない。当たり前話でも現実で考えると微かな希望でも欲しいと願ってしまう。バカだな、僕は……

あれから僕の人生は狂っている。止まったまま毎日毎日同じことを繰り返している。壊れたレコードのように繰り返し続け、いつまでも何も変わらない。絶望に暮れながら繰り返している。僕は君から片時も離れない。決して君から離れたくない。どんなことが起こっても絶対に君を離さない。それが今の僕にできる最高のそして最後の選択だから。それだけは守り通す。君に僕は尽くす僕の人生は全て君に差し出そう。死ぬまで君の傍に、このままでいよう。君が安心して眠っていられるように僕は再び君が目覚めるまでずっと傍にいるから。だから安心して。僕が見守っているから。ずっとずっと
傍にいるから

僕はエルフの末裔、エルフの生き残り。なぜ、僕だけ残っているのか考えたこともなかった。考えようがなかった。だって、僕は知らなかった。自分がエルフだと言うことを。自分の役割を

君は知っていた。なぜ僕に黙っていたのだろう。真実を……。なぜ君は逃げなかった。この僕から……。僕は、殺してしまうかもしれない人をどうして……。愛したのだろう。

仕方なかった。君を好きになるのをやめることはできなかった。僕は自分がエルフの末裔だと言うことを知らなかった。

気づくべきだった。気づくきっかけはすぐそこに何個も、何個も鍵が落ちていたじゃないか。

ブレンには僕が見えていた。

否、ブレン以外は誰も僕が見えていなかった。

エルフが幻の存在と言われる理由は三つあった。一つ目は、エルフは普通の人間には見えないこと。霊力の強い、よほどの人ではない

と無理だ。二つ目は、エルフはこの森から出られないこと。三つ目は、過去に……、滅んでいるから。

僕はこの森から出られなかった。森には知識の泉があつて、そこには多くの書があり、僕には不便はなかった。それでも、誰にも会えず、寂しかった。一人が、孤独が、すごく辛かった。けれど、君は来てくれた。僕の前に現れてくれた。ありがとう、ありがとう。そう、感謝した。君には見えていたんだ。誰にもあつたことがなかった。君に会えた。だから、思いもしなかった。『エルフ』が自分だなんて。信じられなかった『幻の存在』だなんて。御伽噺だと、所詮は物語だと、思っていた。他の誰とも会っていないから。君だけが真実だと思っていたから。

ブレンがこの国のお姫様で、僕に殺される運命にあつただなんて……、神の眷族『幻の存在エルフ』への、贅だとか、そんなの、お伽話でも考えたりしなかったから……。

ブレンはいつもかわいくて綺麗でドジばかり踏んでいて。森の動物たちといつも仲がよくて、いつも無邪気に笑っていた。小鳥と一緒にに歌ったり、動物をひざに乗せて撫でたりするブレンはまるで、聖母マリアのように美しく優しい顔だった。僕はそんなブレンの笑顔に見惚れていた。そんな僕に気づくとブレンは無防備な笑顔を向けてこちらに抱きついてくる。こちらの気も知らないで無邪気に笑うのだ。そしていつもお決まりの言葉。内緒ごとを話すように小さく耳元で言う。

“好きよ”

その言葉を聞いてボンツと音がなるような感じに僕は顔を赤に染める。いった本人にも効果があるようでブレンも顔を赤らめながら微笑む。それから眼が合うとどちらともなく笑い出す。何がおかしいのかわからない。二人は理由もなく笑い出す。言葉に「笑うかどには福来る」と言う言葉があるがこういうことを言うのかもしれない。

と僕はいつも心の中で思っていた。

「そんな時間がいつまでも続けば……。」「いつも願っていた。内心では無理だとわかっていても……。願わずにいられなかった。

あの日に全てが壊れてしまった。あの日が全てを壊してしま
った

僕が……。壊してしまった。

この呪われた眼を開けてしまったから、あんなことになったんだ。

今まで、この森に来たのはブレンだけだった。此処はエルフの森らしい。なぜ、僕はここにいいのか、何故かはわからなかった。でも、少し前までは人が住んでいたらしい。エルフと人は、共生していたのだと、書に記されていた。本当かどうかはわからない。でも、他の人は恐れて誰も近づかない。何を恐れているか。

エルフ

「エルフはもう滅んだのになぜ、恐れる必要があるのだろう。」
とあの頃の僕は思っていた。実際、居たかどうか疑わしい存在なのに、と。

だが、実際にはエルフは滅んでなんかいやしなかった。僕が生き証人だ。だって、この僕は
エルフなのだから。そんな僕を見て、彼女はどのように思っていたのだろう。

君はこの森で眠っている。長く、長く、何年も何年も遙か昔から時間が流れない。この森の時間は遙か昔から一刻たりとも進んでいない。僕が君と会うまでは流れが止まっていた。君はこの森の流れを動かした。君は僕にとってとても暖かな風だった。だが、君が眠りについてからまた時間が止まった。君といた時だけ時間が流れていた。そして僕の時間の流れも止まった。元々僕の時間は欠陥だらけで時間は一生止まったままの筈だった。でも、君が動かしてくれた。風を送ってくれた。だから時間が流れた。夢は本当に短かったけど、一時だけでも嬉しかった。君といた時間は本当に楽しかった。後悔

がないといったら嘘になるけど、心残りはない。さあ、僕の時間よ、止まってくれ。次の風が来るまで僕はこのままでいさせてくれ。次の風が来るまでは僕を彼女の傍にさせてくれ。

そうやって僕は今まで時間を止めてきた。この森と一緒に時間をとめていた。だがもう大丈夫。時間が流れ始めた。一度動き出した流れはもう止まらない。止まってくれないのだ。何がきっかけで流れが始まったのかは定かではない。だが、原因を突き止めたところで何も変わりはない。抗う術を僕はもう、持っていない。やり方さえ忘れてしまった。今僕にできることは新しい風を待つばかり。僕は喜んで次の風を受け止める。全てのために。この森と彼女と僕の思い出のために。

あの日のことを繰り返し思い出す。

より鮮明に、より鮮やかに、より悲慘に、より生臭く

……

この森はもともと僕だけの世界だった。どんよりと暗く陰気で覆い被さるような威圧感、そして、大いなる悲しみ。それが僕の育ったこの森。この森は僕に同調するようにいつも時間が変わらなかった。まさに一体。でも、ブレンに会い、この森も僕も変わった。この森に一筋の光が差し込んだんだ。僕ははじめブレンの事をマリアだと思っていた。

マリアという尊敬すべき人から愛する大切な人へ変わるのにほれほどかからなかった。ブレンの澄んだ真っ直ぐな瞳、高みへと目指す誇り高き心、全ての穢れから助ける優しく綺麗な微笑み。初めてブレンと会ったあの日から丁度三年目のあの日、全てが起こった。いつも通りだった。いつもどおりの朝が来て、いつも通りに過ごして、そしていつも通りに終わるのだと思っていた。いつも通りブレンはこの森にやってきていて僕は泉のほとりに座っていた。ストン、とブレンが僕の横に座る。今日は特別な日。いつもと同じだけど、

特別な日。僕は何も言わない。ブレンは寄りかかってくる。静寂が満ちている。この瞬間が僕は好きだった。何もいわなくてもわかる。幸せな時間。ブレンは僕の横顔を窺いながら言う。

「今日は何の日か知っていて？」

「うん。僕らが初めて会った日だね」

肩に寄りかかっているブレンに意識を向けながらも視線は目の前の大木から外さずに言う。

「よく御存知で。」

と言いながら少し笑う。

「願い事はある？」

と訊く。唐突な言葉にも意外と驚いていない。

「あるわ。私の望みを一つ聞いてくれるの？」

「もちろんだよ。」

こちらも余り驚かないフリをする。毎年恒例のことだし、毎回驚いてももらえない。ブレンは僕の耳に囁く。綺麗な声、でもとても小さな声。言葉を聞いたとき理解できなかった。でもそれは声が小さいとかは関係なかった。ただ、望みの方に驚いた。理解できなかったただだった。

「え、今なんて？」

「瞳を、開けて欲しいの」

僕は耳を疑った。こんなことを言われるとは夢にも思っていなかった。

「ダメかしら？」

僕は迷った。眼を開けて欲しいといわれるのは初めてだった。正直いって、僕はいつも眼を閉じているけど、心の眼とは違うけど、なんか、普通に風景とかも見えていて、だから、僕自身は開けていても開けていなくても構わない。でもこの眼は彼女の住む所では呪われた眼として忌み嫌われていると彼女自身が初めて会った頃に言っていた。彼女もこの眼を嫌がっていると思っていた。だから、彼女の口からその言葉を聞かされるとは思っても見なかった。

「君が、眼を開けちゃ駄目だって言っただんじやないか。」

驚きながらも、拗ねた様に言う。その言葉に彼女は首を傾げる。

「そうだっけ？忘れちゃったわ。ま、いいじゃない。今日くらい。だって、今日は特別な日なんだから。」

君が言うなら、それで決まりなんだけど、僕は少し悩むようにしてから、しぶしぶという感じで頷いた。彼女も、僕の肯定をみて、頷く。

少し緊張する。ずっと、長い間、眼を開けていなかったから、眼を開けたら、陽が網膜を焼いて少し痛いだろうな。とか思いながら、ゆっくり、ゆっくりと眼を開ける。

ほう、と感嘆にも似たような息をつく。

思っていた通り陽が眩しく目を細める。そんな様子も気づかないかのように彼女はうつとりと僕の瞳を見つめる。その様子は異常なほどで。

「ブレン？」

名前を呼んでも反応しない。本当に、どうしたんだろうと思う。

「ねえブレン、どうしたの？」

名前を呼んで彼女の肩に触れる。

「っ！！」

固まっていた。

見入るように、食い入るように、瞳を覗き込み、

呼吸の間さえも瞬きの時でさえも惜しむよう、息を詰めて魅入る。瞳の魔力に、完全に飲み込まれた。

こちらに反応することなく、僕の頬に手を伸ばしてくる。

柔らかく、包むように頬を撫でられる。

しかし彼女はいつもの優しさに満ちた雰囲気を持たない。

ただ、壊れたように、笑った。

戦慄する。

本能的に身体が回避の態勢を取り、足を引く。

「きれいな瞳……」

「力が、魂が抜けていくような、すばらしい魅力だわ……」
感嘆の溜息と共に発せられた音に、急いで瞳を瞑る。

本当に、彼女の言ったとおりの魔力がこの瞳に宿っているのなら、
彼女は……

ドサ、という重い音とに意識を向ければ彼女が倒れていた。

生命活動を止めることはない。

しかし彼女の精神は奥深くに潜み、現実を拒むように閉じ籠ってしまっ

た。
彼女は以後、眠り続けている。

でも、もうそれも終わりだ。

僕たちの間に確かな言葉はなかったけれど、大切な存在。互いに友達以上の想いを抱いていた。

でも、もう終わりだね。こんな生活、いつまでも続くはずがないんだ。

新しい風が吹いてきた。ほら、もうそこに、

結界の内側に入り込んだ存在がいる。

脆くなった森の結界を触れ、優しい力とともに森を愛でていく。

閉じこもった、内だけで途切れた森に新鮮な空気が入る。

結界は割れた先から崩れ、風を舞い込む。

世界は僕の終わりを知っている。だから、任せるよ。

気配が近づく。ガサゴソと音を立てて向かってくる。導などないにもかかわらず迷いなく距離を詰めてくる。

僕には思い残すことなんてないよ。後悔も、しないと決めている。メッセージは残した。だから、君の最後の笑顔と共に、僕は行く。

風が森に一際大きく吹いた。

「あら、わたし……」

頭の中がぼつかりと明いたように空白に白く、何も思い出せない。身体は自然と横たえて身を半身、起こす。

視線をめぐらせれば雑木林からこちらをのぞく人物がいる。彼もこちらに視線を向けた。

途端に違和感が体を走る。

前にあった視線は、これではない、そう身体が訴えかける。見に覚えのない感覚、既視感。

こちらに向けていた視線を横に逸らされ、私も倣う。

「ありがとう」

地面に書かれた文字は酷く懐かしく、でも記憶にない。私の記憶はどこか抜け落ちている。

徐々に霧の晴れていく頭の中で、ここの部分だけが引っかかる。

ここはエルフの森だ。

エルフの末裔がただ一人、寂しく暮らす忘れられた故郷。でも、私にここでの記憶はない。ごっそり、連れ去られたように、その部分だけ。あやふやでさえない。

言葉の墨に書かれた名前は読めなかった。

地面に置かれたバスケットを見る。なかには新鮮な苺、木の実が摘みである。

苺を一つ、摘む。

伸ばした手から何か、キラリと光るものが零れ落ちた。落ちたものは指輪だった。

口に苺をそつと押入れる。

口内に苺の甘酸っぱさが広がる。

「おいしい」

そのおいしさに、涙が零れ落ちる。でも胸が痛い。苦しくて、鋭い痛み。

温かい感覚に包まれる。

泣き顔を見られたくないと思っ、羽織っていたコートを乗せてくれたのだろう。

女性に優しいのね、と心の中だけで思う。

からかう様な心地とは別に心の大部分が深く沈みこんでいる。

涙の生ぬるい感覚は未だ絶えず、どこか熱いを増す。

「」

吐息だけで紡いだ言葉は無意識だった。

「行こう。王の下へ」

「ええ。」

促されて、肩を抱かれて、その場を去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3412m/>

甘甘Berry

2010年10月21日23時52分発行